

主題	アニマルセラピー実施とその効果		
副題	くろ太郎、ピーターとの触れ合いを通じての安らぎ		
アニマルセラピー			
研究期間	12 ヶ月	事業所	社会福祉法人 浴風会 第三南陽園
発表者：越野 裕介		アドバイザー：東京スクールオブビジネス職員	
共同研究者：高橋 登志夫、上袴田 恵、藤田 由加			
電 話	03-3334-2193	メール	info-dai3@yokufuukai.or.jp
FAX	03-3334-2198	URL	http://www.yokufuukai.or.jp/

今回発表の 事業所や サービスの 紹介	社会福祉法人浴風会が平成14年に開設した3番目の特別養護老人ホームで入所207名、ショートステイ15名の計222名の施設です。 サービス指針の、『笑顔のある、あたたかく穏やかに過ごせる我が家』『心安らぎ、寄り添い助け合える我が家』のもとサービスを提供しています。
------------------------------	--

《1. 研究前の状況と課題》

平成19年10月10日より、動物介在活動を目的とし、園内(2階、3階)で2頭の犬を飼い始めた。(実施にあたっての経緯、また当時の状況をアクティブ福祉in2009にて「第三南陽園におけるアニマルセラピー」を発表する)

施設飼育型のアニマルセラピーとしての課題が3つ挙げられた。

- ・時折無駄吠えがあり、ストレスを感じている犬ではセラピー効果が得られない為、その改善に向けての環境整備。
- ・ご利用者が触れ合える機会を、どの様に取り入れていくか。
- ・犬の健康管理、衛生管理。
- ・より効果的に触れ合う支援方法。

《2. 研究の目標と期待する成果・目的》

アニマルセラピーを施設訪問型から施設飼育型に変えることに加えて、犬の状態を見極め、犬小屋をゲージから一般的な犬小屋に変えた。それによりご利用者が好きな時に自由に触れ合うことが出来る環境を構築することが出来た。

その結果を踏まえて、ご利用者が犬に対しての働きかけを行なう意欲向上、また日常の動作や運動の増加がもたらす「生理的・身体的効果」を目的とし、研究に取り組んだ。

《3. 具体的な取り組みの内容》

施設飼育型の動物介在活動の中での注意点(躰方法、健康管理、衛生管理)の確認、またその対応を東京スクールオブビジネスペットビジネス科の教員からの指導、協力の基に行なった。その結果問題点が改善され、アニマルセラピーの効果向上に繋がった。

平成21年10月より専門学校指導員の確認の基に小屋をゲージタイプから一般的な犬小屋(費用15000円)に変え、ご利用者、ご家族が自由に触れ合う機会を設けることができ、大変好評であった。

ご利用者本人及びご家族から犬(動物)の好き嫌いを伺った上で、第三南陽園2階フロア利用者50名から10名を選出した。平成23年4月より12カ月の期間も設けて、対象利用者1人につき、触れ合いの機会の支援を1カ月で3～5回提供した。その時の様子を記録し「社会的効果」「精神的・心理的效果」「生理的・身体機能的効果」を検証した。

《4. 取り組みの結果と考察》

対象者の内、7名の方が笑いや楽しみを通し、安堵感をもたらしている様子が顕著に見受けられた。またご利用者間での会話促進にも繋がっており、アニマルセラピーの効果を体感することが出来た。

その他として、犬の散歩の募集をかけたところ近隣より5名のボランティアが集まり、地域との交流をも図ることが出来た。

《5. まとめ、結論》

現在は多くの人間が癒しを求めている時代であると強く感じる。アニマルセラピーとは障害を持つ人々や高齢者のためばかりにあるのではなく、私たちの未来を拓く為に必要不可欠なものになっていく可能性を秘めているのかもしれない。

私たちの未来を考えるにあたって、このアニマルセラピーの意義を見つめ直すことは、今後、人間と自然の関係や、人間自身のあり方を考える大きな礎となるではないか、と研究を通し思いました。

《6. 倫理的配慮に関する事項》

なお、本研究発表を行うにあたり、ご本人(ご家族)に口頭にて確認をし、本研究発表以外では使用しないこと、それにより不利益を被ることはないことを説明し、回答をもって同意を得たこととした。

《7. 参考文献》

横山章光 著(1996年12月25日第1刊発行)

『アニマルセラピーとは何か』

参考サイト

『アニマルセラピーとは?』

『アニマルセラピー』

『アニマルセラピー今後の展望』

『アニマルセラピー論文』

《8. 提案と発信》

【メモ欄】